

シンポジウム 自然美と芸術美の関係

—両者の今日的分断状況を見据えて問い直す—

府川純一郎（一橋大学社会学研究科博士後期課程）

本シンポジウムでは、一哲学会では初めての美学系のテーマを取り上げた。哲学の古来の対象区分、所謂「真・善・美」に照らせば、一橋大学の哲学・社会思想は伝統的に前者二つに重きを置いており、言語社会学研究科の設立以来、人文学の学際的研究が深まりを見せる一方、同研究科には「美学」の専門枠が存在しないなどの事情があり、この分野での当大学からの学問的な発信は、僅少であったと言える。しかしながら加藤泰史先生が教鞭を取られるようになってから、ドイツ語圏を中心とした近現代の美学言説と、倫理学などとの領域横断的な考察に注目が集まっている。そこで企画提案者は専門的な議論を成立させつつ、多領域への拡がりも可能なテーマとして、自然美と芸術美の関係を選択した。もはや環境破壊抜きには語るができない自然を扱うことに、(自然)倫理学を動員しない理由がない点、また芸術面に言及する際には、音楽・建築・絵画などの具体的事例に関して、人文系・芸術系研究者の広範な知識を要する点で、必然的に領域を跨いだ議論が喚起され得ると思われたからである（そして実際に学内外から40名近い参加者が集まったことは大きな喜びであった）。

両者の今日的関係を問い直す、というシンポジウムの基本姿勢は、観念論の諸言説を嚆矢として、事実性や限界としての自然を超える人間精神の創造性の舞台として規定・自明視されて久しい芸術（美）と、芸術鑑賞の図式を退け、自然科学的知識に通暁した新しい観賞態度を掲げた環境美学の台頭を切っ掛けに、その復権と独自領域の獲得を達成しつつある自然美、という現代の状況認識を出発点としている。企画提案者は、この状況を、独自領域形成の必要性に駆られた両者が、二項対立を先鋭化した為に生じた「分断」状況だと捉え、これに多側面から弁証法的な思考を加え、その修正と再構築を目指した。というのも、境界を定め、互いを独立させるとともに疎外化することは、媒介関係が生み出す生産性に盲目になるだけでなく、互いの理念を満たすための回路が、実は対立する領域に隠れているという思考可能性をも閉ざしてしまうからである。そして、この「分断」状況の解消を、企画提案者は三人の論者に、それぞれ異なるベクトルから追求することをお願いした。

まず東口豊先生には、自然美から芸術美への関係の再検討として、「芸術の自然の模倣」という古典的テーゼの変遷を、音楽に即して解説頂いた。その際、六〇年代に環境美学とは別の形で自然美の復権を唱えた、アドルノの美学に焦点が当てられた。音楽が模倣に務める自然とは、従来は不動の宇宙的秩序体を意味していたのだが、アドルノにおいては、絶えず移ろう、不確かで捉えがたい、非同一的性質を意味するようになる。音楽は、自然のこの「未だ存在せぬもの *das noch nicht Seiende*」を志向して動き続ける在り方を模倣し、絶えざる「経過 *Verlauf*」として、己を構成していく。東口先生は晦渋で知られるアドルノのテキストを読みほぐし、アドルノが古典的テーゼを尊重しながら、不動の秩序や調和性から離れた自然、非同一的な志向を持つ自然といった、それまでは見えてこなかった姿を明らかにする機能を、芸術に付与していたことを明らかにした。

続いて伊東多佳子先生には、両者の中間に位置する環境芸術の知見から、両者の鑑（観）賞態度に境界を据えることの危険性と非妥当性を論じて頂いた。伊東先生は、ナッシュの《トネリコのドーム》に寄せられた批判を手掛かりに、自然を産業的・生活的・学問的な利用素材とみなして加えていけば問題

にされない支配力が、芸術制作として行使された途端、反発を引き起こしてしまうのはなぜだろうか、と問いかけた。伊東先生の見解では、環境美学が拒絶した、自然観賞に芸術鑑賞の図式（ピクチャレスク）が入り込むことと逆の事態が、つまり芸術鑑賞に（人間の介入のないものを貴ぶという）自然観賞の図式が入り込んでいることが、ここで生じている。自然倫理学では、人間中心主義と自然中心主義の二項対立が未だに根強い思想的影響を保持しているが、後者に好意的な少なからぬ環境美学者は、環境芸術を自然に対する美的侮辱として批判する。しかし伊東先生は、人間の介入の外にある原始の自然という表象の無意味さと、今日における不可能性を指摘し、そこには「自然の内在的価値」を、自然存在の不可侵性と絶対性に、強く切り詰めたが故の誤りがあるとした。そして様々な作品例を紹介しつつ、環境芸術は人間の介入を通して「自然の内在的価値」を示すのだが、その価値とは、自然は利用的・道具的な思考対象の外部として、人間に対して存在することが可能である、という意味なのだと言われた。こうした概念運用を巡っては、質疑応答の際に異議も含む様々な意見が寄せられた（自然の「内在的」価値は人間が与えるとされた点等）ものの、まだ日本では理解が進んでいない環境芸術に大きな議論喚起力が備わっていることが認識されたことは、大きな成果であった。

最後の論者は芸術美から自然美への関係の検討として、阿部美由起先生が、ゼールの主著『自然美学』を中心に、自然観賞における芸術鑑賞の図式の排斥に対して、批判を展開した。阿部先生は、ゼールが自然美の三つの知覚モデルを打ち立て、それらに価値序列をつけない一方で、芸術的図像を介した想像的知覚モデルこそ、最も現代の知覚状況に即していると論じた点に注目した。自然美の享受において、芸術的（絵画的）図式を導入することは、その図式を常に凌駕していく自然の無限の多様性故に、芸術創作の絶えることなき契機となるだけでない。グルスキーの作品に見られるように、絵画において描写される自然が、単なる環境への美的没頭や享受においては看過され易い、歴史性や人間社会からの搾取性を開示し、自然に刻み込まれた多層的性格や傷跡を認識させる機能を持つ。阿部先生はこれらを説得的に論じ、ここから芸術を自然の媒介と捉える総括を引き出したが、これは期せずして東口先生と結論を同じくした。

質疑応答の時間では伊東先生の「自然の内在的価値」を巡って、その後の場所を移動しての延長討論では東口先生に対して、アドルノの自然への形而上学的な理解を巡って多数質問が寄せられた。これらの質問には、自然の背後に主体相似的なものの存在を要請することが、哲学的・美学的・倫理的に如何に是認されるのか、あるいはその存在を導入することなしに、如何に自然の価値を確立することができるのか、という根本問題が控えていたと言ってよい。また自然美と芸術美の関係を媒介的・錯綜的なものとして捉え直すという趣意に基づき開催された本企画は、各報告とその総合的検討を通じて、この美的認知枠組みの変換が自然における二つの側面の発見に繋がったことも確認された。一つ目は、自然は調和的に循環するシステムではもはやなく、人類とともに不可逆の滅びの危機に瀕しているという、自然の歴史性格であり、二つ目は、自然も「移ろう」存在として、人間と同じく不動の秩序に安んじるものではなく、より違う状態を志向する、否定的・非同一的側面を持つということである。自然の素朴な美的表象が覆い隠す、或いは等閑にするこれらの側面は、自然美と芸術美との硬直的二元論の解消から、明らかにされたと言ってよく、これはシンポジウムの最大の成果として捉えられるだろう。

なお、伊東先生は今回の発表・討論を発展させ、第68回美学学会全国大会（2017年10月8日）にて、「環境芸術は自然に対する美的侮辱か - 環境芸術をめぐる倫理的問題について」と題された研究発表を行われた。